

伏谷 上伏谷・下伏谷両村は、東の東郷山と西の阿弥陀山に挟まれ、伏谷川は北に流れ水内川に至ります。上伏谷の南部は八幡川の支流域で、西の白砂地区からの本流と共に東の葛原地区に至ります。上伏谷の地区内は小伏原・大畑・郷(伏郷)に分かれ、郷は川角とも言い中心集落です。下伏谷の地区内に飛地が二郷あり、大森八幡神社を総鎮守としています。

西国街道の廿日市・玖波の宿場へ助郷として伝馬を出し、生業は炭焼・薪木産・紙漉等でした。岡坂山著「都志見往来日記」では、小伏原にて宿泊をしたことが記され、翌日に大森八幡神社と白井ノ瀬に行っています。大畑に浄土真宗本願寺派の大通寺があります。



大森八幡神社

八幡川の源流

赤土地(アカトチ) 火山岩質の流紋岩により形成された風化粘土は、多くのアルミニウムや鉄分を含み赤色土壌となります。海拔811mの山岳山麓の標高450m付近に発する湧水は、板木を始め温帯の落葉広葉樹を育てました。地域名は赤土地と地質により表記され、支流名は赤板川と植生により表記されています。読み方もアカトチかアカトチか、1762年(宝暦12年)創建の河内神社の下にある宮前橋では植生のアカトチとなっています。



赤土地の河内神社周辺

河内原(コウチバラ) 赤土地の河内神社の下流部には河岸平地が広がり、赤板川の川辺には古くから石造の観音様が置かれています。河内原の地質は基盤の花崗岩で白い河原が広がっています。



観音様周辺の川



石の観音様

3

八幡原(ヤハタバラ) 八幡神社の南を流れる赤板川は、広い河岸段丘を形成し、石垣の連続する畑が展開します。かつては紙漉のための楮(コウブ)や三桎(ミツマタ)を栽培し、畑地は幕末期にようやく水田化したようです。



八幡神社



桐川

桐川(ユズリハガワ) 南の覆巢山から発し、北の重光で本流と合流します。桐は樹種名で樺葉(ユズリハ)とも言い、山麓一帯に樹林が展開していました。開発は十字に林道を付け、その結果十字原となったようです。白砂地区の中心の重光一帯は、花崗岩質の風化土壌の真砂土が堆積し地名も白砂(シラサゴ)となりました。

川角川(カフスマガワ) 上伏谷村の伏郷の北から発する川で、河川名は合流地点の三叉路に由来します。集落は川から谷に向かって伏すように分布し、地形の状況から伏谷の語源となったようです。



川角川

日浦畑川(ヒウラバタガワ) 安佐南区古山地区との分水界から流れ、佐伯区下河内地区と接し大古谷で本流に合流します。日の当る川岸=浦に畑地が展開し、周辺山麓一帯に畑地が連続しています。



日浦畑川

木末川(コズエガワ) 葛原地区南の七曲峠より発し、葛郷で本流と合流します。支流はさらに支脈を持ち、樹枝状の水路網が発達し、楮の転化と思われます。流域は葛郷状の山道に平地が続いています。



木末川

4

八幡川の流れ

八幡川
歴史福祉
ガイドブック



白川から川坂までの流れ



5

八幡川の支流

源流から白川までに主な支流が4本あり、それから川坂までに支流が6本あります。特に荒谷川は、1999年（平成11年）6月29日の集中豪雨災害において、大きな被害をもたらしました。

トチガ谷川 大谷山からトチガ谷（橋の生える谷）を経て、河内橋で本流に合流しています。

魚切川 窟ヶ山から下魚切の中ほどで本流に合流します。急傾斜地を流れるため流れが速く、土砂の流失が激しいことから、魚道が断ち切られています。

野登呂川 向山から野登呂地区を流れ、藤の木団地の西側を経て、本流に合流しています。

古野川 黄巻谷から古野を経て本流と合流している。

荒谷川 猿林山および柿の木山から発し、上河内と下河内の境を流れ本流に合流しています。この川に沿って中国自然歩道が通っています。

城六川 下河内地区の野地から彩が丘団地の中央を流れ、本流に合流しています。



荒谷川



6



城六川